

『釧路湿原の食物連鎖』

『釧路湿原の食物連鎖』では、釧路湿原に様々な生き物が住んでいること、それらは食べる食べられるの関係で複雑につながりあっていることを、知ってもらうきっかけになればと考えています。

資料『釧路湿原の食物連鎖』について

資料概要：以下の資料をとりまとめました。用途に合わせてご利用ください。

- 1) 釧路湿原に生息する生き物の写真データ
(生き物のグループ(鳥、魚等)ごとにフォルダに区分しています)
- 2) 釧路湿原における食物連鎖の一例
- 3) 『釧路湿原の食物連鎖』についてのトピック

1) 釧路湿原に生息する生き物の写真データ

釧路湿原に生息する代表的な生き物の写真データ(20種類)

【昆虫】トンボ、チョウ、ホタル

【哺乳類】ネズミ、シマリス、エゾクロテン、アメリカミンク、キタキツネ、エゾシカ

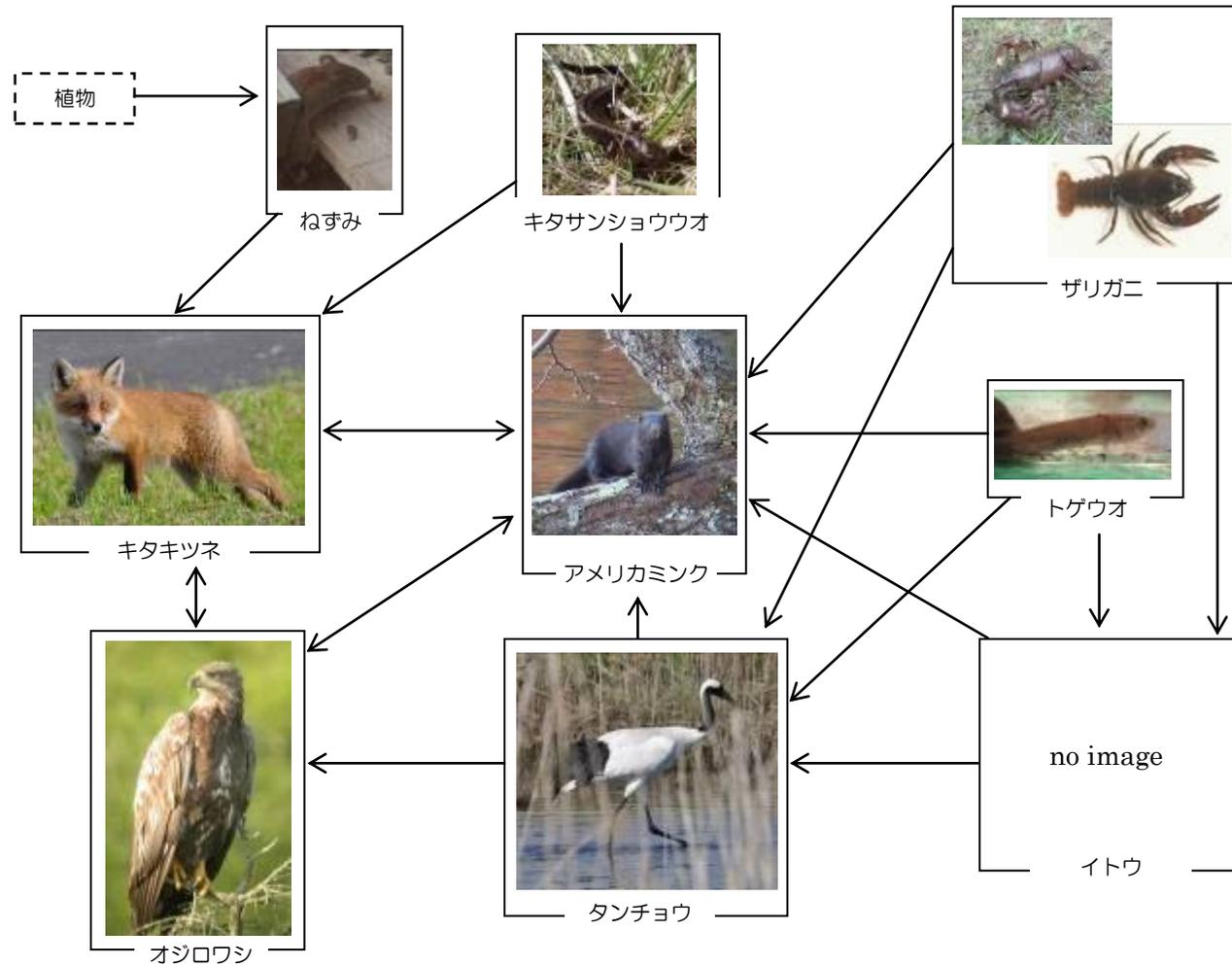
【鳥】オオジシギ、ヒシクイ、オジロワシ、オオワシ、タンチョウ

【魚】ヤチウグイ、イバラトミヨ、イトウ

【その他】ウチダザリガニ、ニホンザリガニ、キタサンショウウオ

2) 釧路湿原における食物連鎖の一例

環境によって同じ種類の生き物でも、様々な別のつながりが考えられます。以下は、その一例です。



3) 『釧路湿原の食物連鎖』についてのトピック

キタサンショウウオ（両生類）

釧路湿原に生息するキタサンショウウオは、氷河期であった約2万年前、当時陸続きであった大陸から渡ってきた氷河期の“遺存種”（生き残り）と言われ、国内では釧路湿原にしか生息していません。キタサンショウウオは1954年に釧路市北斗の湿原で発見され、その後も釧路町鳥通、標茶町塘路、鶴居村温根内などの湿原で次々と新しい生息地が見つかりました。しかし、この数十年間にキタサンショウウオの生息地では、住宅地や牧草地の造成など様々な開発行為が進み、生息数が激減しています。釧路市は1975年にキタサンショウウオを市の天然記念物に指定しました。また、環境省は「絶滅のおそれのある野生生物」の内の準絶滅危惧種に指定しています。

釧路湿原では、4月中旬から5月中旬、冬眠から覚めたキタサンショウウオが湿原の小池に集まり、夕方から夜間にかけて水中で産卵します。5月下旬から、エラをもった全長1cmほどの幼生が孵化し始めます。幼生はユスリカの幼虫やボウフラなど水中の小動物を食べて成長し、8月にはエラがとれた4～5cmの亜成体となって陸上生活に移ります。10月から翌春の4月までは成体も亜成体も、野地坊主の中など比較的乾燥した所に潜り込み冬眠します。成体になるには、3夏以上かかります。主に夜間活動し、クモ、アリ、カタツムリなどの小動物を捕えて食べます。

（参考： 釧路市立博物館々報 No.358 より一部抜粋）

イトウ（魚類）

イトウはサケの仲間で、体調が1mを超す日本最大の淡水魚です。釧路湿原では現在、ごく稀に魚影を見るにすぎませんが、釧路川をはじめ、コッタロ川、久著呂川、雪裡川、幌呂川、仁々志別川など、湿原をゆるやかに流れる河川の中・下流部に生息しています。また、塘路湖やシラルトロ沼などの湖沼にも住んでいます。

イトウは成長に応じて食性がかわります。体長が15cmくらいまではトビケラ類やカワゲラ類などの水生昆虫を餌としますが、これより大きくなると水生昆虫のほかに魚も食べるようになります。体長が30cm以上になると、スナヤツメ、フクドジョウ、イバラトミヨやエゾトミヨのトゲウオ類など、魚のみを食べます。さらに大物になると、胃袋からネズミの死がいが出てくることからわかるように、ネズミあるいはカエルやヘビなども捕食するようです。

最近、釧路湿原での釣りだよりも全く聞かれなくなりました。河川環境の悪化や過剰な釣りにより、湿原のイトウは絶滅の危機に直面しています。

（参考： 釧路市立博物館々報 No.359 より一部抜粋）